

創作
恩讐いづれか

此の一篇を故學友野口智孝君の墓前に供ふ

一

綱 脇 龍 妙

日清戦争がすんで、まだ幾年も経たぬ、或年の春であつた。京都の町々は、まだ、緩たりとした大宮人氣分が、充分に残つてゐて、美しく着飾つた若き女性等が、祇園、清水、嵯峨、小室等の花見歸りに、櫻かざして、そゞろ歩きする優やかな姿を、到る所に観るのであつた。

花見が終ると、今まで、多く、人に知られてゐなかつた阿彌陀ヶ峰の、豊太閤の墓が、白御影で、新しく、大きく、麗しく建てられて、それが落成すると、三百年祭が、豊國祭りとして、非常な賑いで執行せられた。

幾日も、夜も晝も、満都假裝姿で踊り狂つた。警察の取締りも、わざと、頗る、寛大にされてゐた。男が女の衣裝をつけて、顔を白く塗り、女が男の衣裝をつけて、化けてゐるのが多かつた。

一、

頃は天文五年の春よ

元日生れの人は誰れ

豊國さんどえらい御威徳

二、

末は天下を握れる始め

草履つかみし人は誰れ

豊國さんどえらい御威徳

三、

四國九州小田原かけて

攻めて扉なびかす人は誰れ

豊國さんどえらい御威徳

四、

吉野醍醐の花をも眺め

謠曲作りし人は誰れ

豊國さんどえらい御威徳

これは、漸く記憶に残つてゐる。當時の踊り歌の斷片である。

二

糸月少龍は、市外松ヶ枝に在つた佛教小學林を卒業して、四條堀川の中學林に入學した計りであつた。此の學校の生徒の大部分も夜は、それ／＼に假裝して踊りに加つた。随分奇拔な裝かぶを凝こめた者もあつた。

平素頗る物騒な様な顔をしてゐた澤村某は、能く似合う定九郎に成つて、腰に刀を差して出た。九

州男子の巖永某は、炭俵の一方を擴げて、其のまゝ笠に被^{かぶ}つて踊つて出た。偶々五條の橋の上から、祇園の藝妓等の大群が、緋縮緬の着物に、花笠を被つて、踊つて遣つて來たのを觀て、跳び込んで一所に踊つてゐたが、忽ち幾人もの藝者等の顔や手に、怪我さしたので、彼等が、悲鳴を揚げて逃げ惑ふのを、彼は痛快がつて喜んでゐた。が、遂に巡査に見つけられて、五條警察署に引かれた。それでも小言を謂はれたゞけで歸つて來た。

糸月も、幼少の頃から、非常な太閤景負であつた。それは彼の父親が水呑み百姓でありながら、操^{あやつ}り人形が道樂で、中にも太閤記十段目の久吉遣いが得手で、其の久吉になる人形や、その衣装が、ふだん、彼の家の、古い黒光りのする薩摩杉の着物函に、彼等の穢^{きたな}い平常^{ふだんぎ}着と共に、だみこみに入れられてゐたのが、幼時より彼が、秀吉崇拜の主なる原因となつたのであるらしい。

彼は、心から、此の祭典を喜んだ。何だか、肩味が廣い様に感じた。然し、新入生で、臆病者で、因循な性質の彼は、心中には、自分も耐^たらぬ程、假裝踊りに加つて見度くて、それでゐて、遣る勇氣を出すことが出来なかつた。

然し、彼は、豊國祭よりも、一層大事に考へてゐることがあつた。それは、彼の學校のすぐ近所の或本山に昔から古く安置せられてゐる由緒深き彼の立像釋迦牟尼如來の尊像のことであつた。

彼は、小僧の時から、單純に、佛教の本尊は、殊に法華經の宗旨の本尊は、理論を弄する迄もなく、此の立像の釋迦牟尼如來に決まつてゐると、誰れに教へられたと無く、堅く／＼信じてゐた。そうして彼の机の向ふの壁には、いつも此の尊像の御形木おかたぎが有難そうに貼りつけられてゐた。

彼はいつも、佛教の本尊の不統一を痛切に慨いてゐた。それで、彼が、此學林に来て、第一に喜んだのは、此の大神教主の勸請せられてある、眞ぐ傍に來たことであつた。彼は學林に來ると、第一に、此の立像釋尊に參拜した。大概の日、學課がすんで、夕方の散歩時間が來ると、決して此の御堂に參つて、二時間計りは必ず讀經した。彼は釋尊に對して、生きた人間に謂ふ様に訴へた。

『アナタは、唯一人の救濟主であらせらるゝ。アナタは唯一人の佛教の御本尊であらせらるゝ。佛教が、幾ら、亂雜を極むるにしても、餘りに甚しい今の状態ありさまである。此の御堂は、殆んど。蜘蛛が巢を張らなければかりの御状態、それに何ぞや、隣りの本願寺の阿彌陀如來は。權教方便の佛であることに間違は無いのに、日々のあの群參、此の方は眞佛、本佛であるのに、如何に宗徒が、無耻怠慢であるとはいへ、此れは又餘りに畏れ多い、申譯けのない、残念なことでありませぬ。無智闇鈍あんどんの私、體質虚弱の私であります、將來命に掛けても、アナタを眞實世に輝かさねばならぬと思ひます。主師親三徳のアナタ、何卒私の稚少なる願を、不啓と思召せ。』

彼の讀經後の、闇の中の涙乍らの熱願は、これであつた。彼は豊國祭が、何時の間に終つたかも知らなかつた。

糸月が、立像釋尊に參拜してゐた頃、すぐ横手に在る本願寺の黒い狭い裏門から、また肩上げ姿の、凜つとした装をした娘が、よく俤に乗つて出るのを糸月は觀てゐた。そうして、世には美人もあるものかと思ふてゐた。今は無き人の數に入つて、無憂華の主人公となつて惜しまれてゐる儷人武子夫人が、それであつた。

三

彼の學校の生徒は、僅々八十人足らずであつた。彼と同時に松ヶ枝小學林から入つて來た者は、彼の外に三人であつた。

その中の志摩智朗は、頗る飄逸で、仙人の様な顔をして、可なり奇行に富んでゐた。が内實は頗る伶俐で、中々注意深い緻密な心を持つてゐた。他に對する思ひ遣りも深かつた。彼が急に出家した原因には頗る哀れな物語りを有してゐる。糸月と志摩は同年で、餘程深く交つてゐた。

野中智廣は徳島の出身であつた。非常な勉強家で、中々良い頭を持つてゐた。毎日學課がすむと、五條醒ヶ井の有名な漢學者山本章先生に、四書の講義を受けてゐた。そうして、夜は又三條寺町の基

督教青年會の夜學校へ行つて直接西洋人から英語を教はつてゐた。

野中は、糸月より二つ年少であつた。二人は兄弟の如く心から互に敬愛してゐた。然し糸月は、野中が餘りに激しい勉強をするので、健康を案じて、幾度と無く警告してゐた。それで日曜が來ると態と誘ひ出して散歩に出かけたりしてゐた。

今一人は吉岡圓真で、巖村學林長の弟子であつた。師匠が大本山の貫首で、六牙潮師びつちゆう以來の王羲之の名筆であるだけ、吉岡も若年でありながら、中々好い筆蹟を持つてゐた。尼僧の如く大人しくて、それでゐて俊敏であつた。相撲が強くて、糸月等は直ぐに倒された。野中と吉岡は同年で、よく氣があつてゐた。

四

糸月等四人と同時に、他の所々の小學林から、此の中學林に進級して來た者は二十幾人であつた。その中には赤木秀典、大村觀長、北峰大旭等の、中々の出來物も雜つてゐた、

入學試験が行はれた時に、先づ佛學の試験が課せられた。續いて同月に普通學の試験も行はれた。が、松ヶ枝小學林から來た糸月等四人に對しては、學力が明瞭だからとあつて、免除せられたまゝに濟んだ。それは此の學林の教頭で事實は林長である笠滿僧正かさまが、松ヶ枝小學林の林長をも兼ねてゐた

からであつた。無論この林長も名義だけで、事實は矢張り、教頭名義の芝海瑞義師が總ての事務を遣つてゐるのであつた。

笠滿僧正は、高潔の人格の所有者で、純粹の學者肌で、世事には全然無頓着の人であつた。専心佛學の教授と研究とを、自己の使命と思ふてゐらるゝ様であつた。此の入學試験も實際は、誰れが斯くさしたのかは判らぬが、笠滿教頭は眞實此れで善いと信じ切つてゐられたのであつたらうと思はれる。

糸月は心中ひそ潜かに「これで善いものだらうか」と何となく不安に思ふた。

翌日入學試験の結果が講堂に張りだされた。そうして此れが又大いに糸月等にも意外であつた。糸月等松ヶ技出身の四人は皆二年級に、他の二十幾人は皆一年級に編入されてゐるのであつた。

糸月は胸がドキ／＼した。野中も、志摩も、吉岡も、同じく皆眼を見張つた。一年級に編入された多數も、上級生も、悉く何物かを感じたらしかつた。

豊國祭りの騒ぎの間は無事であつた。恰憫な志摩は考へたと見えて、四、五日すると、三人に斷たはりもせずに、瓢然として何所かに行つて終つた。實は岡山の小學林に入つて佛學の研究をしてゐたのであつた。彼が中學林を逃げ出たのは、一つは英語が非常に嫌いであつた爲かとも思はれる、

寄宿舎の部屋々々に、寄り／＼上級生の密議が行はれた。一年級の赤木までが、此れに加はつて忙しく奔走するらしい模様が、見へた。

鈍威の糸月は、それが、何事であるかを、知るべくして知らなかつた。日數が經つに従つて、同部屋の上級生までが糸月に對して折々不可解の表情をすることが多くなつた。それでも糸月は、自分等が問題に擧つてゐると云ふことに氣が附かなかつた。

不意に生徒は同盟休校を宣言した。上級生等が委員を設けて、はげしく、教師課幹部に接衝を重ねてゐるらしかつた。

糸月は、たゞ茫然として爲す業すべを知らなかつた。吉岡も野中も只困つた顔をしてゐた。三人が相談もして見たが、何の智慧も出なかつた。

其の時、計らずも、越前の糸月の師匠から電報が入つて來た。『大病至急歸れ』の短文であつた。糸月の同部屋の上級生等は、それが、糸月の師匠が、早く事件を知つて、糸月を救ふ爲めの作り事と思ふたらしかつた。

然し糸月は驚いて、大急ぎに歸國した。米原驛で北陸線に乗り換へる時、僅かの時間を利用して、小さい町を尋ねて、夏密柑を幾つか買つて來た。それは師匠は大熱で苦んでゐると思ふたからであつた。

糸月の師匠の病氣は眞實であつた。醫者も檀家の大部分も、八、九分まで駄目と見込をつけてゐた。糸月は悲しかつた。然し氣を取り直して、法弟等と共に命がけに看護した。四十日計りして最早安心の域に達した。彼は深い心で佛天に感謝した。

學林の生徒から四方に發した激文は、幾度と無く糸月の師匠の寺にも配達せられた。然し糸月は讀む隙も考ゆる隙も無かつた。又實際のところ、自己の所屬の級の上下などは、全然眼中に於てゐなかつた。それ故無論師匠にも何事も告げ無つた。

五

暑中休暇がすんで、暫くすると、學林から、紛擾解決の報と開校の通知が來た。糸月は、師匠の許しを得て再び久しぶりに學林に歸つた。林長も、教頭も、諸教授も、普通學教師の外は、全部顔が變つて居た。

同時に、笠滿前教頭は上京して東京大學林教頭に就任した。斯の人が、やがて宗門學府の最高權威者になる様になつた地盤は、此の時に出來たのであつた。

野中も吉岡も歸校して居た。糸月はおめく此の學林に歸つて來たことが、如何にも前學長教頭等に濟まぬ氣がした。吉岡も野中も出來れば他に轉校し度い意志を漏して居た。然し糸月は野中をなだ

めて、此れを思止まるようにした。

糸月と野中とは、他の學生に對する遠慮から、寄宿舎を引き拂つて、吉岡の居る本山奥座敷裏の庇部屋に移つて、其所から通うやうにした。

一月餘りが過ぎた。糸月は漸く學科に對する興味を感じて來た。然し他の學生と彼等との間は、何となく隔りが見えて居た。糸月に對して同郷の上級生までが、段々彼を避ける様な傾向が見えた。

都の朝の學林の庭に、稍く白く薄霜が降り、高尾、嵐山等の楓が、濃く色づく頃になつた。晩秋の壯嚴なる自然に、特に感激を持つ糸月は、天空半分を美しき紅に、四方の峰々を薄紫に染めて、しづかに愛宕の嶺みねに沈む夕陽を譬へ難き感情を以て拜みながら、漸く同窓との間に深めらるゝ間隙かんげきを心配し出した。

或日、個人としては糸月と親交ある上級生の一、二人が、彼を寄宿舎の部屋に招よんで忠告してくれた。それは、『君達三人は來年の三月まで休學した方が善いだろう。君達が、此のまゝ二年級に止つて居る以上、全學生の感情は解けぬと見ねばならぬ。そうして君達は排斥を受けて到底居耐みたまれぬことになるだろう。君達は一年を僥倖やうじやうして居るのだから、こゝ僅か四、五ヶ月休むだけの事ではあるし、結局それが君達の幸福となるだらう』と謂ふのである。

事の當否は別として、糸月等は此の學校に居る限り、脆くも斯くするより外に路は無かつた。

殊に糸月も、野中も、此の宗團に屬するから、此の學校に入つては居るものゝ、心は寧ろ學校外に在つて、凡そ有益な公開講演があれば、智恩院でも、本願寺でも、同志社でも、東寺でも、何處にでも行つて眞劍に聽いて居た。時には再び一生に得難き、非常なる有益な教訓を獲たこともあつた。それで、此の學校を休んで一年卒業が遅るゝ位は、全然問題として居なかつた。

吉岡も、師匠が隣りの本山の貫首である以上、卒業しても、どうせ此所に居るのだからと云ふので、これ又格別問題として居なかつた。

三人は協議の結果、すぐに明日から休學することに申合した。そうして糸月も、野中も、師匠の許に歸ることに決めた。

糸月は勸告してくれた上級生の友人に、早速此の事を告げて挨拶に代へた。

學林の上級生等は、此の事を豫期して居たのであつたらう。早速會議を開いて談を決め、先の上級生の友人を以て糸月等に申込んだ。それは『學友の全部は、君等三人の立場に同情を持つて居る。然し君達は休學して歸るにしても、此のまゝ休學して來年四月再び登校して來た場合、又互に不快な感情を以て遇はねばならぬ。それは双方の不利だから、一層今度和睦をして、來春喜びの顔を以て再び

遇はうでは無いか。そうするには明朝君達が歸國する前に、互に懇親の意味で、茶話會を開かうではないか。」と謂ふのであつた。

此れも人の好い糸月等は道理と思ふた。そうして、茶話會の費用は、全部糸月等三人が負擔することに決つた。

六

糸月と野中とは、暫く學都を離れることが、如何にも名残り惜しく、打ち連れだつて木枯し散る、下加茂神社の森をくゞり、比叡の麓、曼珠院の紅葉を遙に眺めて、松ヶ枝小學林に行つた。そうして芝海教頭に暫しの別れを告げた。兩人の眼からは涙が自づと膝に落ちた。

二人は更に小學林の門をくゞつて坂を降り、すぐ其所の庵室に、笠滿僧正の師範で、同僧正に更つて小學林長の名義を持たれてゐる澄水し權大僧正を訪ねた。

鶴の如く瘦せた上品な七十幾歳の澄水御庵は、孫の如き糸月等の述ぶる不憫な談を溫顔に少し憂を雜へて、痛々しげに聽いて居られた。

七

乗り物の無かつた往復五里の路を、松ヶ枝から歸つて來た糸月等は、疲勞した體を、夜遅くなつて吉岡を加へて、寂しき告別の宴を開いた。それはお決りの燒鍋の牛肉を、一所につゝいて晚餐を共にするだけであつた。

彼等は殆んど無言であつた。中學林の消燈しょうとうの鈴れいが、靜な森を通して聞へてゐた。

折しも、急がしく、疊を蹴る足音が聞へて、障子の外から、威勢好き大聲で、

『糸月等三人ゐるか。』

と、呼んで、荒々しく開けて入つて來た人物を眺むれば、丈高く、筋骨きんこつ逞たくましく、元氣に満ちた三十歳の計りの豪傑らしき僧、然も片手に一升德利を下げてゐる。

糸月等が驚あはき遽あはてゝゐると、『アハ、』と笑つて、又一人入つて來た者がある。見ると芝海教頭が、大きな竹の皮包みを提げて立つてゐるのであつた。

『一體誰だ。』

と、糸月が謂うと、吉岡が

『君達は、未だ、初めてであつたらう。此の方が、笠滿僧正の御法弟で金村さんといふ方だよ。』

と、紹介すると、糸月も野中も益々驚いて挨拶はしたものゝ、何の爲めに斯の人達が、今頃態々遣つ

て來たのかと心中に訝いぶかつた。すると、金村さんが、

『實はな！君達二人が今月松ヶ枝の師匠を訪ねて、休學して故郷へ歸るといふて、暇乞をしたそう
な。僕達は、それで、師匠から命ぜられて、君達を引止め到大急ぎにやつて來た。大體君達は何の
爲めに休學するのだ、先學長が君達の學力を、二年級相當と確認したから、二年級に編入した迄で
は無いか。其所に何の不都合がある。好し又其所に議論の餘地があるとしても、已に其の總ての責
任を先學長教頭等が負ふて辭職してゐるでは無いか。辭職する時、君達四人は二年級に其のまゝ止
め置く談にして、解決を附けたのではないか。其れを今になつて、生徒が又何の彼のと謂ひ出すな
どは、卑劣千萬の行爲ではないか。絶対に休學するに及ばぬ。生徒が斯る愚劣なことで騒げば、新
林長が抛つてをく筈は無い。若し又萬一、林長が生徒を鎮めぬなら、僕達に考へがある。頸に掛け
ても、此の喧嘩なら遣つて見せる。たとへ學林がつぶれる迄も君達を負けさせはせぬ。斷じて歸る
な！かまうものか、何と生徒が謂はふが、知らぬ顔をして平氣で登校してをれ。まあ心配するな—
—サー飲めサー飲め』

と、がぶつと一口に酒を飲んで、盃を糸月に差しつけた。柴海教頭は持つて來た一貫目近くもあるか
と思はれる竹の皮包の牛肉を、其所に擴げた。

急に部屋の中が、春の様になつた。糸月等三人の眼からは、涙がはふり落ちて居た。

松ヶ枝の澄水大僧正は、糸月等が歸ると、直ぐに柴海教頭を召び、旨を言ひ含めて西陣に金村師を訪はせ、そうして二人を此所に急がせられたのであつた。

糸月等は澄水御庵の深い情けを懐おもふた。恩師芝海教頭の弟子に對する厚い愛情を想ふた。笠滿僧正の法弟にして同時に肉弟たる此の金村師の情義に強い救すく援いを心から感謝した。眞に地獄で佛に遇つた感じであつた。が、然し又非常に當惑した。

糸月は大に考へた。然し彼の返答は決まつて居た。差されて盃を干して金村師に返して、そして口を開た。

『御兩師の御親切は、私共深く膽に銘じて、終生忘れ得ぬ所である。殊に澄水御庵の御心慮からと承はつて、一層恐縮に耐へぬ次第である。が、然し私共は今日已に學生諸君と、休學のことを誓つたのであり、其上明朝歸國前和解の意味の茶話會まで約束したのである。御親切を無にすることは、眞に残念であります。矢張り私共の初の方針通り、許して戴き度いのであります。』

と、謂ふを終らず、金村師は

『ナニ、學生等と休學の約束をした。殊に和解の茶話會、そんな馬鹿なことが何所にある。それで

は此の方から『悪うございました』と謝る様なものでは無いか。其の約束は僕達から取消してやる。まあいゝ己達に任してをけ。必ず善い様にして見せる。サー飲め〜』

盃を廻して頻りに三人に勧められる。柴海教頭は始終ニコ〜笑つてゐたが、飲めば泣く癖のある人で逐に泣き出して謂ふた。

『僕は、僕は、松ヶ枝最初の卒業生としての君達の前途を心配してゐる。所が今度の事件、笠満前教頭は最早此所に居られぬし、僕達が心配して遣らねば……金村師が先から謂ふ通りだ、マー任してくれ、そう斷言してくれ。ナー君達。』

三人は益々當惑した。そうして顔を聚めて潜々協議した。然し纏りは無つた。糸月が又

『御厚意は真に有難いが、男子が一端約束した事を、善かれ悪かれ取り消す譯には行かぬ。それに貴師方の御力で、此のまゝ在學が出来るとしても、其の爲め學林を再び紛擾の渦中に陥れると想はねばならぬ。三人の名譽の爲めに、七十幾人が又一學期なり二學期なり、勉強をし損なうといふ事は、徳義上忍べぬ所と思ひます。何分御了察を願ひます。』

と、詫びるが如く、訴ふるが如く、凜として謂ひ放つを、金村師が

『それでは君達は餘り勝手が過ぎはせぬか。能く考へて見よ。巖村前林長や笠満法兄等が犠牲にな

つたは何の爲めだ、それでは君達の方が濟まぬでは無いか、間違つた約束を取消す位が何だ、君等も卒丸きくだまを下げて居るでは無いか。それに見よ、生徒等は親切そうに謂ふても、君達を誑たぶすのだ。馬鹿を観るぞ。』

金村師の顔は赤熱し、眼は血走つて見えた。芝海師頭も悲痛な面持で、幾度もく繰返し決心を促した。三人は絶体絶命となつた。進まなか、恩師等に不孝、義人の情を無にする。退かなか、約束を破る、再び騷擾を招く、進退全く谷きはまつた。凄壯の無言が續けられた。

糸月は、生れて初めて此の様なつらい責め木にかゝつた。『世の中は眞に勞つといものだナ』と熟々思ふて心中に泣いた。然し『此所が大事だ情に殉じてはならぬ。』と無理に心を勵まして、

『何と申されても今日の場合、恩師等に不孝の罪を通るゝ途はありません。其の代り、他日必ず今日日の御恩に、報ゆる時を作つて見せます。何卒是非今晩はこれで御容赦を願います。』

座は全く白らけて終つた。議論は猶幾度も繰り返された。然しそれは同じことで、互に何の効も無かつた。大分飲んだ酒も一向酔ふ者も無かつた。遂に四時の時計が鳴つた。金村師と芝海師とは起ち上つた。金村師が

『それでは歸る。君達の随意に遣れ。三人共充分身體を愛してくれ。邪魔をしたナ』

と謂ふ聲の裏にも熱い情が籠つてゐた。芝海教頭の眼にも涙が光つて居た。二人の姿はまだ薄闇い朝霧の中に消えた。

やがて、夜が全く明け放れて、取り亂した部屋の中に、三人の顔には益々悲痛の色が見えた。

八

八時の約束の茶話會の時間が來た。三人は詮方無く、半ば屠所に曳かるゝ羊の思ひで、學林の講堂に臨んだ。

茶話會の會場は、講堂正面右側の二間を打通して、テーブルを馬蹄形に並べて設けられて居た。物々しく個々に生菓子が盛られ、茶呑茶碗の外に、硝子のカップも添へ、所々に土瓶と香竈葡萄酒の壺までが立つてゐた。

やがてベルが勇ましく鳴つて、七十餘人がずらりと着席した。皆喜色が顔に見えて居た。糸月等三人は導かれて、左側真ん中邊に並んで着席した。

司會者が開會の辭を嚴肅に述べ終ると、薄場大喝菜の中に、正面中央席の五年級的首席鬼頭鷄林君が、威風堂々と長軀をつき立て、

『生等本學林生七十餘名は、本年五月以來、百餘日の間、横暴極まる前職員幹部と戦ひ、随分惡戰苦

闘をつゞけたが、眞理は邪に加擔せず、邪は遂に正に勝たず、我等堅き團結の義軍の爲めに、敵軍は悉く馘首の刑を見るに到つた。然し乍ら、前幹部の偏頗なる愛に依つて、二年級に編入せられて僥倖を得て居た三、四の者が、猶其儘に残つて平然として今日に到り、生等甚遺憾に耐へ無かつたのであるが、此れも今日自ら顧みて當分休學する事となり、茲に生等は、最後の凱歌を擧ぐるに到つたのは、滿場の諸君と共に慶賀に耐へざる次第である……。」

と、述べた。糸月は『終つた。遣られた。』と驚いた。『まさか』と思ふて居た野中と吉岡の顔色がサツと青くなつた。鳴龍英洲君、鳴谷洋觀君、植村靜遠君等の秀才達が、交々立つてそれ／＼に氣炎を擧げた。その度毎に喝菜が擧つた。赤木秀典君が立つた。

『遣恨十年一劔を研く、生等七十餘名は、暴戾なる前學長教頭等の爲めに……』
大喝菜が又續けられた。糸月は最早度胸を決めた。何とか挨拶を述べて善意の復讐でもと思ふた。が彼の因循の性質は其れも遂に出來無かつた。然し心中には、

『好し、面白い、幾らでも遣れ、不肖乍ら己は法華經中にも常不輕品の信者行者だぞ。韓信なら一人だが、己は百人でも、千人でも、幾らでも股をくゞつて見せる。人を見損なふなよ、然し斯る痴少な出來事に、微塵も貴君等を恨む様な、愚らぬ人物では無いぞ、有難い、有難い、至心に信する』

不輕品は、社會に立つて役立つと思ふてゐたが、此れは單純な學校生活にも、早や大なる救いに預つて非常な効果を見せて戴いた。近くに在す南無釋迦牟尼如來、南無妙法蓮華經』

糸月の眼からは、感激の涙がポロ／＼と落ちた。彼は野中と吉岡の心中を限りなく不憫に思ふた。そうして隣席を見た。然し二人の姿は何時の間にか消えて居た。

誰か美聲で詩吟を初めた。其れに合せて誰れか、刀を持つて兒嶋高德を舞つた。つき／＼に代つて詩が吟ぜられ、劔舞が舞はれた。喧々轟々場が亂れ初めた。

やがて閉會の辭が宣せられ、破るゝ如き『萬歲』の三唱が、一同と糸月との唱和によつて擧げられた。

糸月は、三人分の茶菓子を袂にして、裏路から走つて彼等の部屋に歸つた。そうして驚いた。

吉岡と野中とは、頭から蒲團を被つて、聲を揚げて泣いて居た。此れを觀た糸月も、一時に涙が止め度も無く出た。そうして胸が痛くなつた。蒲團を引き剥いで、二人の前に手を着いて、

『勘忍してくれ、勘忍してくれ。僕が悪かつた。君等に對して餘りに殘酷であつた。』と謝つた。吉岡が謂ふた。

『否や、僕達はまだ若いから、斯んな苦勞を嘗めた事が無つた。君一人の所爲では無い』

三人は又泣いた。そうして來春の再會を誓うた。糸月と野中とは、急いで行季を縛つた。迎への俾が來て、糸月は先に出發した。

夕陽が、斜に琵琶湖の面を照して、將に比良の山に沒せんとする頃、糸月は米原驛に着いた。

北陸線の終列車は已に出發した後であつた。彼の頭の中は、朝からの光景で一ぱいであつた。餘儀無く驛前の旅館に泊つて、二階から湖面を眺めて、會て作つた覺えの無い詩の眞似をして即吟した。

男子立^テ志^ヲ出^ツ郷關^一

不^レ圖今日遇^フ厄難^ニ

前途遼遠歸雁啼^{ナリ}

夕陽將^{ニシテ}沒宿^{セントス}湖畔^ニ

彼が、越前の寺に歸つて三日目、徳嶋に歸り着いた野中から手紙が着いた。痛ましい文句が連ねられてゐた。其の終りに

濡れ衣をきつゝ鳴戸の濱千鳥泣くもみやこの空を眺めて

わがこゝろ知るや知らずや同窓の友よ來ん春待ちて知れとや

糸月は、手紙を顔に押し當てゝ泣いた。

(終り)